真和の卒業生が語る「能登半島地震での医療支援活動」

東京慈恵会医科大学の救急医学講座を担当されている光永敏哉さん（真和高等学校卒業）が、AMAT 第 1 次先遣隊として能登半島地震の被災地に向かい医療支援活動を行われました。

その時の様子をオンラインでお聞きすることができましたので、光永さん自身の寄稿とインタビューの内容をお知らせします。

（聞き手：真和中学・高等学校広報部）

１．「寄稿」

能登半島地震での医療支援活動
～AMAT 第 1 次先遣隊としての活動報告～

今回、AMAT(全日本病院医療支援班)として、2024 年 1 月 2 日から 6 日まで、能登半島地震の医療支援を行ないましたのでご報告させていただきます。

2024 年 1 月 29 日

医療法人社団永生会南多摩病院　総合内科･救急科　医長
東京慈恵会医科大学救急医学講座　助教
光永　敏哉

■2024 年 1 月1日 16 時 10 分ごろ

能登半島を中心としたマグニチュード 7.6 の地震が発生しました。当院副院長より翌日 2 日の午前に AMAT 隊の先遣隊として医師、看護師、救急救命士の 4 名で現地入りするよう指示をいただきました。妻からも「これはあなたが担うべき仕事」と背中を押してもらいました。

■1 月 2 日 18 時八王子市南多摩病院から出発

準備を整え 1 月 2 日の午後 18 時頃に八王子にある南多摩病院から病院救急車に乗って出発しました。

■1 月 3 日午前 0 時富山市

富山市に 1 月 3 日の午前 0 時ごろ到着しました。

■同3日午前富山西総合病院で情報収集

同日午前より AMAT 関連病院である富山西総合病院で情報収集を開始しました。被災している医療機関はあるものの、富山県内では医療支援のニーズがほぼ無いことを確認し、念の為富山県庁内にある災害対策本部も訪れ、やはり富山県内の医療支援の必要性はないと判断

しました。そして、平成建石病院内に展開していた AMAT 統括本部からの指示で、我々のチームは石川県庁内に展開していた総合対策本部へと移動しました。

■同 3 日石川県庁

石川県庁にて関係者と相談したところ、DMAT(災害派遣医療チーム)の拠点本部がある公立能登総合病院にて AMAT 本部を立ち上げるか、あるいは被災の最前線である輪島まで行き、更なる情報収集などを行うかの判断を求められましたが、我々の後にすぐに 3 隊別のチームが来ることが分かっていた為、我々のチームは輪島まで向かうことを決定しました。

■同 4 日七尾市から輪島市へ

4 日の午後 1 時半頃に七尾市を出発したものの、高速道路はストップしており、一般道も渋滞ならびに道路のひび割れや複数箇所での土砂崩れの影響でなかなか進むことができませんでした。

■同 4 日 19 時半輪島市公立輪島病院

隊員の慎重な運転で、公立輪島病院に到着したのは午後 7 時半過ぎでした。

公立輪島病院内では DMAT 隊が 11 隊活動していましたが、救急外来での診療支援のニーズがあることが分かったため、我々AMAT 隊は救急外来の夜勤から診療支援に参加しました。

■同 4 日公立輪島病院での医療支援活動

電気は通っていたものの、断水していたため採血検査は行えず、簡易血液検査と CT、レントゲン、エコー、心電図による診療を余儀なくされました。建物自体は無事でしたが、蛍光灯が壊れて天井から垂れ下がったり、壁が落ちるなどしていました。また、輪島病院で勤務されている常勤の医師、看護師、薬剤師、放射線技師の皆さんは何日も院内で勤務されている状況で、中には子どもさんを避難所に一人預けて、医療活動を行っている方もいらっしゃいました。

救急外来では脱水症や低体温症の高齢者の他に、避難所生活によるス

トレスから不整脈を発生された高齢者の方もいらっしゃいました。処置をする最中も地震が多発する状況は時より恐怖を感じるものでした。

■同5日午後指示により後発隊に引き継ぎ帰路に

我々は５日のお昼まで活動し、帰路につきました。

■同6日午前１時半八王子

最終的に八王子に到着したのは６日午前１時半過ぎでした。

■被災地の人々が教えてくれるもの

輪島から帰る途中で市内の様子を見ましたが、輪島の綺麗な街並みが破壊されており、心を痛めました。しかし同時に、今回のミッション期間を通して、真心で一心に向かう医療スタッフや東北の大震災の時も人々は立ち上がり再生したことが心の中に映像として出てきて、諦めると言うよりは必ず一本の白い道があると信じることができ、さらにこの地震を条件として我々はどのように変わり、次なる災害へと準備できるのだろうかと考えました。

また、どんなに良いシステムがあっても、どんなに素晴らしい組織図があったとしても、そこに携わる人間の心意気で決定的に現実は変わってしまうことを如実に見せていただきました。

私自身も今回の経験を通して、救急医としてさらに研鑽を積まなければいけないという原点に立ち返ることができた、非常に大切な時間だったと思います。

是非、真和の皆さんの中からも同じ分野で救急医療を支えてくださる方が出てくることを心から期待しております。

２．光永医長にインタビュー

2024 年 1 月 29 日
オンラインにてインタビュー

■AMAT とはどんな組織ですか

AMAT は（All Japan Hospital Medical Assistance Team：全日本病院医療支援班）の略で、「社団法人全日本病院協会」で組織される民間病院が災害に見舞われた際の支援体制を整え、強化していくものとして立ち上げられました。DMAT（Disaster Medical Assistance Team）は厚生労働省の認めた専門的な訓練を受けた災害派遣医療チームであるのに対して、AMAT は民間の病院で組織された災害医療派遣チームといえるでしょう。

また AMAT の特徴として各病院に所属する救急車を交通手段として災害地に派遣することになっており、必要に応じて患者の緊急搬送などにも従事することがで

きます。

■道路が寸断されていると報道でありましたが途中の行程は大変ではありませんでしたか

発災から何日も経っていませんでしたので、道路の状況に関する情報も不十分なままでしたが、できる限りの情報を県庁などで得て、慎重に救急車を進めました。道路の亀裂や、陥没などを慎重に避けながら、私たちのチームは救急救命士の隊員が運転も担当してうまく車を進めてくれました。

土砂崩れで道路が塞がれている場合はどうしようもありませんが、重機がかけつけてくれて片側通行で何とか通れたところも多かったですね。

重機もよく見ると他県のものも見かけ、こんなに各地から支援に来てくれているんだと、心強くも感じましたね

■AMAT として被災地に到着してまず行うべきことは何なのでしょうか

何よりもニーズの把握でしょうね。それを元に問題点を整理します。次に具体的に最適な医療支援の内容・方法を決めていきます。

私は今回が初の災害の現場での活動でありましたが、現場のニーズや状況は千差万別で、最適な医療支援の方法は現場のチームや関係者や支援を必要としている人たちと協働して考えなければなりません。そこには、単にマニュアルや組織だけに頼らない、医療人としての信念というか心意気みたいなものがなければ最適解はみつからないような気がしています。

■光永さん自身が心がけていらっしゃることはなんでしょうか

繰り返しになりますが、医療支援を必要としている人々の声をしっかりと聴くことだと思っています。その声の内容は、日が経てば変わってきます。その日の天候によっても変わってきます。支援の行き届き方でも違ってきます。そこをしっかりとくみ取っていくことです。支援を必要とされている人たちは、その多くが我慢をされています。そこを解きほぐして聴けるようになるのも医療人として大切なことだと思っています。

■救急医療をめざされたきっかけはありますか

私は、もともとは小児科医を目指していました。高校生の時にある小児科の先生と出会い、こんな風に人の人生の再生に携わることのできる仕事があるのだと大変感動し、まずは医師を目指すようになりました。大学進学後も小児科医を視野に入れて学んでいたのですが、そんなときに東日本大震災が起きました。黒い津波に町も人も全てが押し流されるのを見て、最も困難な場所に希望を照らし、人々の命・生活・人生を守りたいと思い、自分も第１線で救急医療にあたりたいと強く思うようになり、救急医療をめざすようになりました。

幸いに自分のキャリアを重ねる中で、フランスへの留学や病院の救命センター

の立ち上げに携わったりなどと貴重な経験も積み重ねもできてきました。現在は、大学で救急医学講座も担当しています。

■真和の後輩へ伝えたいことはありますか

学生時代は人生で最も勉強する時代です。そして、勉強は単に受験に合格するためだけに取り組むものではなく、将来様々な社会の困難に解決の道をつけるための人間力を育む時間でもあります。だからこそ、思いっきり経験してほしいと思います。受験 before と after では自分自身が全く違います。そう考えると今は勉強に集中できる一番の環境にいる時期です。

そういう学びをしていく中で、日々ものすごいスピードで進歩していく技術や社会の状況を常に人間の介在を意識して見つめていってほしいですね。技術の発達の後は成熟が必要です。それには人の心が基盤になっていなければ成熟はあり得ないと私は思っています。

■インタビューを終えて

マニュアルも技術も心。人としてどうあるべきかということが前提に備わっていないと役に立たたないし、逆に弊害にすらなってしまうと、医師の立場から光永さんは繰り返し話されていました。被災地を支援するということは、こういう「心」が集合して達成できるのだと改めて感じました。

光永さんが指摘されていた WHO の提言である「mission and passion」は、正にこのことであろうと強く思いました。